Tohto University

家族計画の授業から学生の考えている人生計画　計画記載用紙から見えてきた人生

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2021-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森谷, 美智子 メールアドレス: 所属: 東都医療大学ヒューマンケア学部看護学科
URL	https://doi.org/10.50818/00000048

© 東都大学 2015

【資料】

家族計画の授業から学生の考えている人生計画
－計画記載用紙から見えてきた人生－

The life plan that the student thinks about from family planning
The life that I was able to see from plan mention paper

森谷美智子
Michiko MORIYA

キーワード：母性看護学総論，家族計画，人生設計，ライフコース

Ⅰ．はじめに

母性看護学総論では，母性看護の基礎となる概念をはじめとして，対象を取り巻く社会の変遷と現状，女性のライフステージ各期における看護，リプロダクティブヘルスケア，出産する人の健康や女性健康というところに力点を置き授業を展開している．

今まで，疾患のある人の看護について学んできたが，母性看護の対象者は疾患のある人の看護とは違い，健康であり，出産する人の妊娠期・分娩期・産褥期に焦点あたるものの，学生にとっては異質のものととらえている感がぬぐえない．そこで，家族計画の授業展開時には，「家族計画は人生計画でもある」という考えのもとに，各自の今後の人生計画を立案してもらうことにした．自己の人生計画の中で，家族を持つ意味や，その後の授業で展開する，性感染症の予防や人工妊娠中絶の理解に繋がると考えた．一番の目的は家族計画の理解であり，避妊に対する知識に結びつけられればと考えて，妊娠の成立と避妊の方法を伝え，人生の計画を今考える意義等から，自己の人生計画を立案してもらい，後日それらの結果を学生に提示したものである．

Ⅱ．方法

１．対象および調査時期

対象は母性看護学総論（必修科目）を受講する２年次前期学生で，調査は単元「家族計画」授業の終了時とした（平成 26 年５月）．

２．調査内容

調査は自記式アンケート調査とし，調査項目は性別，描く結婚年齢、 希望する子どもの数，初産年齢，第二子以上の出産年齢，子育てと働き方，職業キャリアを含めて将来の姿，仕事の希望退職年齢など．

３．調査における倫理的配慮

本学の倫理審査委員会の承認を得た後に実施した（承認番号 J2601）．調査の実施に当たっては，家族計画記載用紙の結果を学内の紀要に投稿する旨を学生に説明し，個人を特定するような記載をしていないことを確認した．さらに，調査票の提出をもって調査への同意とみなすこと，個人を特定するような集計や結果ではないこと，調査票の未提出があっても成績評価等に何ら不利益がないことも説明した．調査結果は授業内で公開し，学生が抱く家族計画像として情報を共有した．

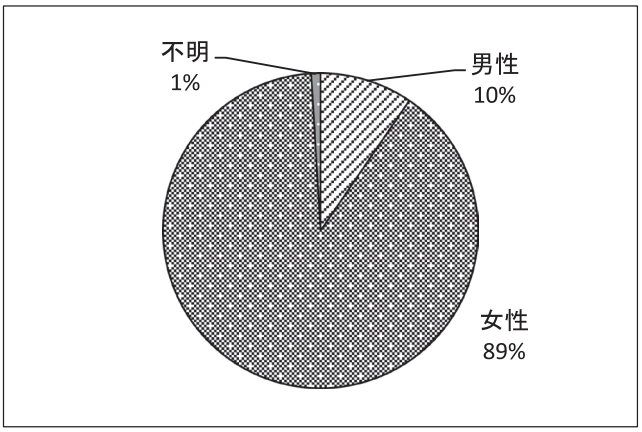
東都医療大学ヒューマンケア学部看護学科

Ⅲ．結果

1．対象の性別（図 1）

図 1 に対象の性別とその割合を示した．

図 1　性別（n =105）

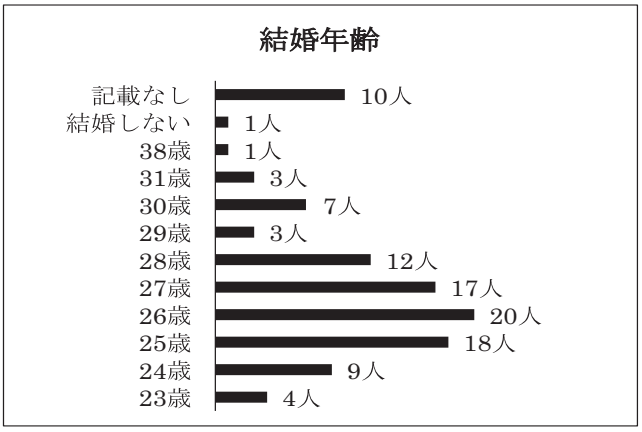


2．大学卒業と結婚年齢（図 2）

全員が大学をスムーズに卒業すると考えている．卒業までは個人差が出ていないが，予測する「結婚」という場面になるといろいろな年齢に分かれる．一生結婚するつもりはないという人もいた．記載のない人もいたため，記載のあった人のみをグラフに表した．

日本人の平均初婚年齢は，総理府のデーター[1]によると 2012（平成 24）年で，夫が 30.8 歳，妻が 29.2 歳となっており，1980（昭和 55）年（夫が 27.8 歳，妻が 25.2 歳）前後が学生の親の年齢と推測すると，学生の結婚年齢は，親の結婚年齢に類似していた．

図 2　結婚年齢



3．子どもの数と出産年齢（図 3，図 4，図 5）

子どもの数を何人にするかという部分では，約半数が 2 人であり，3 人の子どもを持ちたいという人も全体の四分の 1 の割合を占めた．双子を出産したいとい人が 3 人いた．

出産年齢が 29 歳前後に多くの割合を占めていることから，初産年齢は結婚後平均 2 年後に予定している．と考えられる．また，総理府の統計結果 1）からも，日本人の結婚年齢と出産年齢は同じような傾向がみられる．

第二子出産に関しても，年子で子どもの出産を希望している人もいるが，次の子は 2 年後に希望している割合が高かった．

図 3　子どもの数の予定

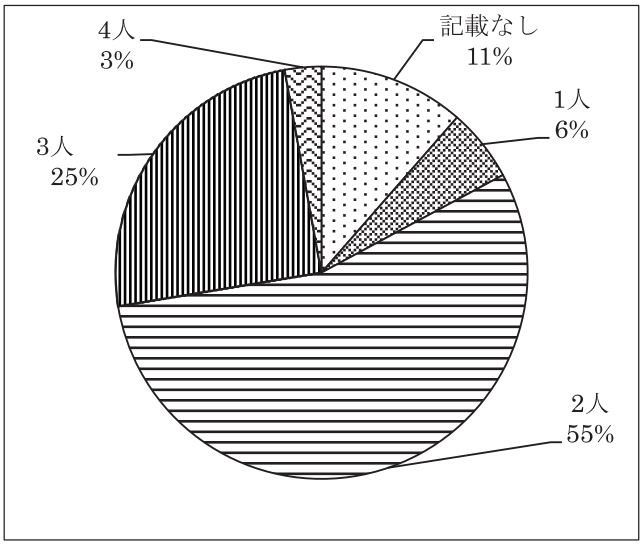


図 4　初産年齢

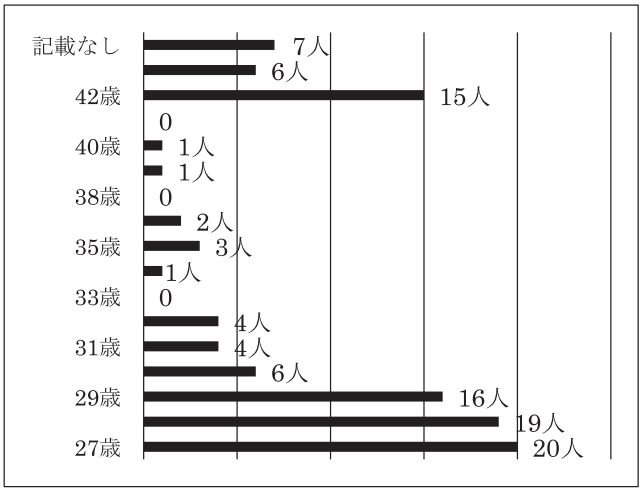
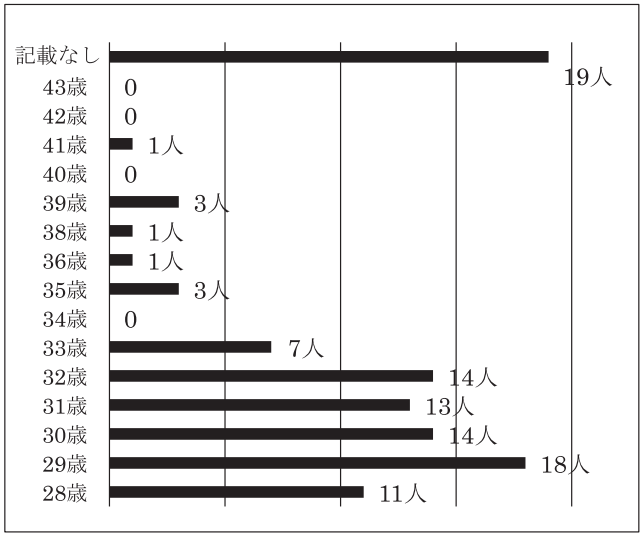


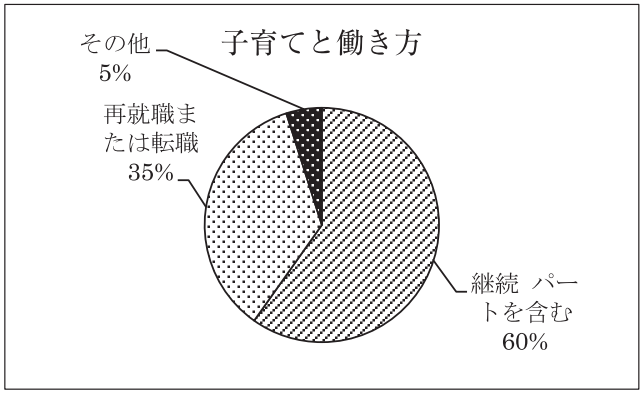
図５　第二子出産年齢



４. 子育てと働き方（図６）

子育てと働き方に関しては，子育てしながら仕事は継続したい．子育てと両立させるために働き方をパートに変える，クリニックで働く等の，両立に向けた方法が記載されていた．子育ての期間は家にいて，子どもの手が離れたなら再就職という働き方を考えている人もおり，大部分の人は，子育てをしながら，仕事を人生の中から抹殺しない選択をしている．その他の人は，結婚相手が外国人のため外国で暮らすが，帰国したならば再就職を考えている人もいた．

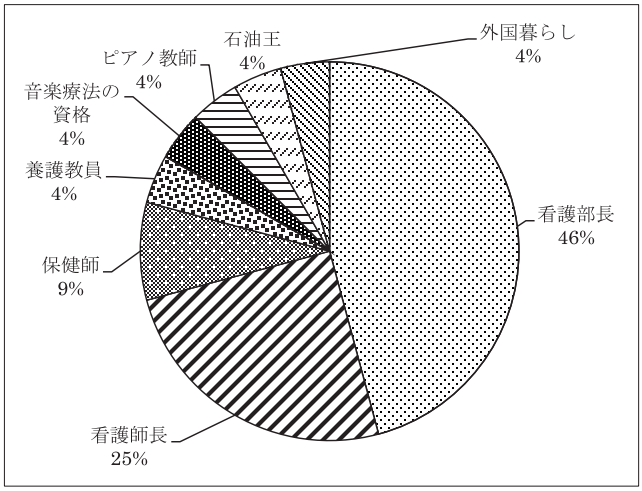
図６　子育てと働き方



５. 将来像（図７）

将来像として看護師長や看護部長というキャリアを目指す人がいる．最初は看護師で経験を積んで，のちには保健師や養護教員という職業の選択を考えている人のほかに，看護とは別の生き方も視野に入れている人がいることがわかった．

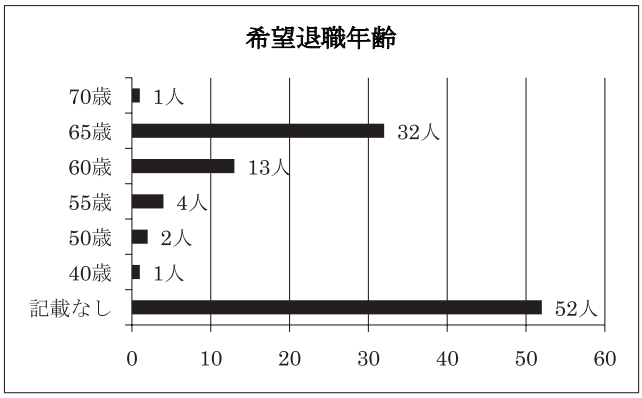
図７　将来の姿



６. 希望退職年齢（図８）

その他として，老後はどのように過ごしたいと考えているのかは，記載されているものの中から見てみると，家を建てたい，マンションを購入したい，世界旅行に出かけたい，夫と旅行に出かけたい．のんびり暮らしたい．等が挙げられている．
また，自分はどのような疾患で命を落とすのかという事も記載されていた．

図８　希望退職年齢



Ⅳ. 考察

平成25年版　厚生労働白書[1]によると，『理想は2人以上子どもが欲しいと考えており，「子どもは生きがい･喜び･希望」としている.」現代の若者で未婚･既婚を問わず子どもを持つことについてどのように考えているかに対しては，「子どもがいると生活が楽しく豊かになる」，「生きがい・喜び・希望」，「無償の愛を捧げる対象」とする回答割合が高く，子育てによる経済的，精神的負担よりも，子どもは日々の生活を豊かにしてくれ，生きる上での喜びや希望であるという意識が強い．また，子どもがいない，あるいは1人いる25から34歳の妻の場合，約8割がさらなる出産希望を持っている．子どもが2人いる場合においても，25～29歳の妻では47.5％，30～34歳の妻では28.3％がさらなる出産希望を持っている．こうしたことを見ても，子どもを欲しくないと思っている夫婦は少数派である．また，理想子ども数は，1982（昭和57）年時点においては「3人」が最多割合を占めていたが，2010（平成22）年時点では「2人」が約5割となり逆転している．一方,「0人」や「1人」を選択する夫婦割合は依然として少数派であるものの，その割合は増加しており，3人以上を選ぶ夫婦割合は低下が続いている.』学生の記載でも同じ傾向を示していた．しかし，今回の記載は上記のような子どもを持つことに関しての深い考えがあっての子どもの数とは考えにくく，現状の自分の置かれている環境の中で考えた子どもの数ではないだろうか.

同じように，子どもを持ちながらの就業に関しても,授業の中で女性のライフコース[2]を･専業主婦コース＝ 結婚し子どもを持ち，結婚あるいは出産の機会に退職し，その後は仕事を持たない・再就職コース＝ 結婚し子どもを持つが，結婚あるいは出産の機会にいったん退職し，子育て後に再び仕事を持つ・両立コース＝ 結婚し子どもを持つが，仕事も一生続ける・DINKS（Double Income No Kids）コース＝ 結婚するが子どもは持たず，仕事を一生続ける・非婚就業コース＝結婚せず，仕事を一生続けると女性のライフコースは多岐にわたっている．このことを意識して記載しているかは定かではない．どちらかというと，自分の置かれている環境要因も加味されているものと考えられる．将来の姿に対しては24名のみの記載であり，多くの学生は将来の自己の姿を具現化できかねていると考えられる．記載された内容の集計を学生に渡す時に，自己の将来像を思い描くことは，時として大切な考えであり，今の学習全般にも関心度が高まる要因であることを伝えている.

学生の反応として，今回記載したことで，または何も考えていなかったことに気付かされたと個人的に感想を述べていた．希望退職年齢に関しては，いつまで働くかという意識付けはしていなかったが，学生の記載を見ると，定年をいつ迎えるかが記載されており，定年後は，夫と旅行に出かけたり，のんびり過ごしたいとの内容から，今は忙しく学習しているがいつの日かのんびりしたいという願望の表れととらえた．家族計画を主にした授業内容の中に「避妊法」について教授し，産後や授乳期，その後の避妊法について具体的に実施したが，その内容を適切にとらえて記載されている人は11人のみだった．短い時間の記載だったので，限界があったと思われるが，この結果から，今後はその部分をさらに強調して教授する必要がある．看護学を教授する者にとって，今教えることのみに囚われず，将来像を意識させることで，現状の学習方法を見直すことや，自己の将来ビジョンを描くことで，学習意欲を引き出すヒントになるのではないかと考えさせられた.

Ⅴ. 結論

学生にとって自分の将来像や家族を持つという架空の事柄を受け入れて人生設計を記載してもらったが，大多数の学生は，このように自分の人生を考えたことがなかったので，今後の人生を考えることができて良かった，と感想を述べており，人生を考えるきっかけとなったようである．しかし，中には「想像もできない」として記載を拒む学生もいた.

現時点では考えられなくとも，今後は考えていくことも必要であることは認識できたようであると，学生との会話の中で感じ取れた．まさしく，家族計画は，「自分の人生をどのように生きていくか」「自分の家族を何人にするか」を考える良い機会と思われる．将来にむけて「自分の人生は自分が主役である」と考えて，実りある人生を創造しながら歩んでほしいと願っている．しかし，家族計画を理解するという学習目標に対しては，女性のライフプランに合わせた受胎調節を意識して記載している人の数が少な

く，自分の人生計画を嬉々として記載している様子とその結果を振り返ると，最初に人生計画を記載させて，それを基に受胎調節を教授するという方法を実施することで，授業目標には近づくのではないかとも考えた．今回の方法を実施することで，学生の家族を何人にするのかという考えや，自分の人生のありかたを創造する体験を通して，学生の学習意欲と，学習することへの満足度を増幅できるそのための教授法を模索しながらも今後も追及してきたいと考えさせられる教授体験であった．

文献

１）平成 25 年版：厚生労働白書 . 厚生労働省 .2015
２）森恵美他：母性看護学概論：医学書院 .2014
・斉藤益子他：家族計画指導の実際―少子社会における家族形成への支援 . 医学書院 .2014
・北村邦夫他：目で見る家族計画 日本家族計画協会 .2003
・湯沢雍彦・宮本みち子：データーで読む家族問題 . NHK BOOKS .2010
・現代日本人の意識構造 . ＮＨＫ放送文化研究所編　NHK BOOKS .2010
・女性の暮らしと生活意識データー集　2011　三冬社

この原稿は，学生に示した結果に一部修正と加筆したものである．

受理日：2015 年 1 月 26 日